

満点	75点	目標得点	55点	試験時間	90分	偏差値	70
大問数	4 (現代文2・古文1・漢文1)	小問数	28				
	[解答形式]	選択式	22/28問	記述式	6/28問	論述式	0/28問
	[問題難易度]	C	2/28問	B	11/28問	A	15/28問
※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1… 出題形式は昨年と変わらず、大問(一)・(二)が現代文であり、大問(三)が古文、(四)が漢文、という構成となっている。
- 2… 現代文(一)は、硬質な評論文が課され、やや難化した。(二)は、芸術論からの出題であったが、これは傾向も難易度も例年通り。
- 3… (三)古文と(四)漢文は、いずれも昨年度並みに平易なレベルであった。「早稲田の文学部」というと、つい「古文と漢文も難解」とのイメージを抱くかもしれないが、実際は古・漢とも「読みやすい」。だが、そうはいつでもやはり論理力(文脈判断力)が必要とされることは言うまでもない。

こんな力が求められる！

現代文二問、古文一問、漢文一問という出題形式からもわかるように、現・古・漢それぞれについての一定水準、及びそれ以上の学力が要請される。「穴」や「付け焼刃」にならないように、選り好みせず、かつ計画的に学習を進めることが肝要である。

現代文(一)に関してであるが、「論の展開の正確な把握力」は勿論のこと、「抽象的な文章内容を咀嚼しながら整理する」トレーニングを積んでおきたい。なお、お茶ゼミのOS早大国語に於いては、年間を通して骨のある本格的な評論文を扱う。また、この本年度の(二)のような、われわれの「自明性」や「あたり前」を疑う、もっと端的に言えば「常識くずし」の指(志) 向を持つ文章は、早大の好むところであるが、OS早大国語では勿論、類似の指(志) 向を持つ文章を扱ってもある。

現代文(二)は文化や芸術に関するエッセイ風の文章から出題する例年通りの傾向であり、その意味で、早稲田の文学部らしい問題であった。この文化論・芸術論は、ジャンルとしては入試現代文ではさほど珍しいものではなく、お茶ゼミのStandard国語、Advanced国語でも扱う。だが、見かけの「わかりやすさ」・「読みやすさ」に引っ張られ、肝心の文章の論旨や問題の意図を見逃してしまわないよう、丁寧に、そして注意深く取り組まなければならない。

(三)古文・(四)漢文ともに、センター試験並みの「読みやすさ」であり、お茶ゼミのAdvanced国語、ややもするとStandard国語でも十分に対応可能である。だがここから「早大文学部の古文・漢文は簡単である」とか、さらには「古文・漢文の学習は手を抜いてよい」といった安易な結論を導き出しては決してならない。盤石な基礎知識は大前提であり、その上での論理力(文脈判断力)が常に求められる。傍線部だけを見て安易に解くと見事に引っかかる設問ばかりであり、それが早稲田の早稲田たるゆえんである。

大問別分析

【一】

予想配点	20 / 75点	時間配分の目安	30 / 90分
文章の種類／ジャンル	現代文／評論		
〔出典〕	小坂井敏晶「責任―責任概念と近代個人主義」『環』Vol. 38		
〔文字数〕	約三二〇〇字		
出題形式	選択式6題、記述式3題		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問一 A	問二 B	問三 B	問四 C
問六 A	問七 B	問八 A	問九 A
			問五 A
お茶ゼミカリキュラムとの関連 高三OS早大4月期「13」・12月期「40」等と対応			

●本大問の特徴・概要

- 社会心理学者による、抽象度の高い評論文からの出題。「社会心理学」というよりはむしろ、「倫理学」の色彩が強い印象を受ける。なお、倫理学者が、本文同様に「責任」を論じたものとして大庭健『責任』についてなに？（講談社現代新書）を挙げておく。
- 本文の内容をやや暴力的にまとめてしまえば、「われわれが自明のものと考えている「責任概念（感覚）」に疑いを投げかける」という指（志）向のものである。「論全体の展開」を把握するのはさほど難しくなかった筈だが、それでも、文章のあちらこちらに現れる「小難しい言い回し」に苦しめられた受験生も多いのではないか。字数も、昨年と比べてやや増加し、全体として難化した。
- 問四の「脱落文整序問題」は、例年、大問（一）か（二）のどちらかでのみ出題されていたが、このように本年度は（一）・（二）両方で出題された。そして、後述するようにこの問四こそが本大問で一番の難問であったと言つてよい。

●注目すべき小問

問一 確かに、一見したところ、文章全体の論旨に関わる良問に見えなくはない。だが、選択肢を見比べてみれば、一つだけ性質（あるいはベクトル）が異なるものがすぐに見つけられるだろう。それが正解である。

問二 早大文学部の現代文・評論問題に特有の出題形式であり、その意味で、早大文学部の現代文との「相性診断」ともなり得る問いである。例年のことながら、紛らわしい選択肢や、「日本語のセンス」を試すような選択肢が仕込まれている。丁寧に正解を選びたいところ。

問四 この手の「脱落文整序問題」へのアプローチの定石としては、「各文の指示語に着目する」ことであろうが、それでもなお、苦しめられた問題であったのではないか。何とか「ロ↓ハ」、「イ↓ニ」の順序を確定したとしても、ホの置き場所に悩む。選択肢二の「・・・呼ぶことさえできない」に気付けば、ホとの関係も見えてくるのだが。

問七 積んできた現代文のトレーニングの差が出る良問であろう。具体例に目が眩むと、つい口を選んでしまう。「傍線部分の本質」を言い当てている正解はハであり、その「本質」まで読み取る読解力・注意力は、やはり、トレーニングを積むことによって養われるはずだ。

【二】

予想配点	20 / 75点	時間配分の目安	25 / 90分
文章の種類／ジャンル	現代文／評論		
【出典】	木俣元一「中世芸術に近づく、中世芸術が近づく」『芸術のトポス』		
【文字数】	約二六〇〇字		
出題形式	選択式5題、記述式2題		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問十 A	問十一 B	問十二 A	問十三 B 問十四 A 問十五 A 問十六 B
お茶ゼミカリキュラムとの関連			
高3 Advanced・Standard 国語の7月期「芸術論」、冬期講習「早大現代文」と対応			

●本大問の特徴・概要

- 例年の傾向を踏襲し、芸術論から出題された。本文の内容をざっくりまとめると、「現代の「芸術」概念を、中世芸術と比較することによって再考する」といったところか。先述したように、見かけの「わかりやすさ」や「読みやすさ」に乗せられると、本文の細部、さらには論旨を見逃してしまうので、一層の注意力を持って取り組むべきである。
- 分量・設問のレベルともに、昨年とほぼ変わらない印象。早大文学部らしい雰囲気の問題である。
- 後述するように、設問の中には珍しい形式のものもあるが、見た目に騙されず、確実に得点していくこと。

●注目すべき小問

- 問十 「不適当な一文を指摘する」という、恐らくは早大文学部の問題でのみ、お目にかかるであろう、珍しい形式の問題。早大文学部でも数年ぶりに復活した。見た目こそ特殊だが、評論文読解の基本である「主張と具体例の対応関係」に敏感であれば、正解の箇所はすぐに見つかるだろう。
- 問十一 (一)の問四と同様、ここでも「脱落文整序問題」が出題されている。二をどこに置くかが悩むところだろうが、時間をかけて丁寧処理する。
- 問十二 ごくごく平易。「選択肢への誤りの仕込み方」が粗く、早稲田らしからぬ問題であった。
- 問十三 難問であった。イとホまでは選べるであろうが、ハの処理に悩む。本文中からはハの対応部分となりそうなのは見つけることが出来ないし、傍線部Iとの関わりもいまいち見えてこない。だが、ハは傍線部IIとつながりがないことは明白なので、そうすると、このハは必然的にもう一方の傍線部Iとつながりがある、ということになる。
- 問十六 早大文学部の現代文では毎年出題されている内容(不)一致問題。それなりに露骨に誤りを仕込んでくるはずなのだが、念のため、「各選択肢と本文との照合」のみに留まらず、「選択肢同士の比較」の作業も怠らないように。

【三】

予想配点	20 / 75 点	時間配分の目安	20 / 90 分
文章の種類 / ジャンル	古文 / 説話		
〔出典〕	『古本説話集』上・二八		
〔文字数〕	約一二五〇字		
出題形式	選択式 8 題		
小問別難易度	〔常識 1、口語訳 3、文法（敬意の方向） 1、和歌の解釈 1、内容一致 1、文学史 1〕 ※問題難易度：C 難問、B 合否を分ける問題、A 正答すべき問題、を示す		
問十七 A	問十八 A	問十九 B	問二十 A
問二十一 A	問二十二 B	問二十三 B	問二十四 C
お茶ゼミカリキュラムとの関連 高3 Advanced・Standard 国語 10 月期「13」などに対応			

● 本大問の特徴・概要

○ 昨年度よりやや字数が増加（50 字）して一般的な入試の古文より分量は多いものの、ジャンルは平易な「説話」であり、センター試験よりも読みやすいレベルといっている。その分、傍線部だけの解釈では解けない設問ばかりであり「早稲田らしさ」は健在である。

● 注目すべき小問

問十七 基本的な「古文常識」。ただ根拠の「時雨」が十行以上離れた次段落にあるところがミソか。

問十九 超頻出の「敬意の方向」。人物関係が混乱しややすい絶妙な箇所を突いてくるところはさすが。「読めた」つもりで全滅だった受験生は多そう。もちろん致命的である。

問二十 早稲田の定番「動詞の解釈問題」である。昨年度は商学部が問うてきた。「De」動詞Ⅱ「あり・はべり・さぶらふ・おはす・おはします」が狙われたら「生きる・暮らす」を疑うのは基本。今回は選択肢のロ・ホに速攻絞る。

問二十一 立教や明治など MARCH 系も好む「意味が無限」系の単語の解釈。まずは基本単語「あてなり」から速攻ロ・ニに絞り、文脈判断できたか。

問二十二 今回最も難解で合否を分けた設問になっただろう。「和歌の解釈」は「和歌」から考えないことが鉄則である。「下句が表している内容」という問いに惑わされてはならない。実際、下句は何の根拠にもならない。「和歌は本文から考える」のである。最後に上句からも「確かめ算」して答えが確定する。今までの演習による経験値がものをいう。お茶ゼミ生は高三夏期講習を中心に十分研鑽してきたはずだ。

問二十四 「文学史」問題。従来、文学部の文学史問題は現役生にやさしい基本事項しか問わなかったが、今年は珍しく意地悪な設定をしてきている。へはすぐに確定するが、問題はもう一つの答えである。多くの受験生がハ『経国集』とニ『選集抄』で迷い、「勅撰集」を連想させるニを消してハにひっかかってしまったのではないか。逆にいえば、それだけベタな引っかけ選択肢ともいえるのだが、間違えた生徒を責める気にはなれない。またここで落とすとしても残りの設問はお茶ゼミで鍛錬した生徒なら対応できるものばかりであるはず。合格するには十分である。

【四】

予想配点	15 / 75 点	時間配分の目安	15 / 90 分
文章の種類／ジャンル	漢文／伝記		
〔出典〕	『唐大和上東征伝』		
〔文字数〕	約一九四字		
出題形式	選択式3題〔空欄補充1題、解釈1題、内容一致1題〕、記述式1題〔返り点1題〕		
小問別難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す		
問二十五 A	問二十六 A	問二十七 B	問二十八 B
お茶ゼミカリキュラムとの関連 お茶ゼミ設置の一連の「漢文」講座と対応			

●本大問の特徴・概要

○ 文章量、問題数、難易度いずれも例年並み。文学部は必ず「漢文」は独立して出題されるが、だからといって過剰な警戒は無用だ。特別な知識が必要なわけでもない。ただ「古文」同様、傍線部からだけの解釈では解けない設問をちゃんと用意してくる。また後述するように「漢字」の力も他大学以上に要求される。今年も徒に難解な問いは見あたらず良問ばかりであった。満点でありたい。

●注目すべき小問

問二十五 「漢文」の教養・知識を問うものではなく、「常識・漢字」力に関わる設問。そういう意味では中学生でも解けるし、解けない人は何だろうが解けないと言ったら言い過ぎか。漢文特有の対句表現を利用して、「山や川（風土くらの意識は連想したい）は（中国と日本では）異なるが、風や月は（中国も日本も）同じ A だ。（A は同じだ。）という文脈で選択肢イ塵・口天・ハ胞・二人・ホ流・へ郷から選ぶのならば、漢文の素養がなくとも解けるだろう。だからあまり漢文に身構え過ぎない方がいい。もちろん答えは「風・月」の共通項の「天」である。

問二十七 傍線部の解釈問題は基本句型のうち、接続型の「レバ即」と限定型の「耳」が含まれていて、もちろん押さえておくべきなのだが、傍線部だけの解釈だときつちりに引っかかるようになってくる。このあたりがいかに早く稲田らしい良問。もちろん間違えたら致命傷である。合否を分ける問題とっていい。